片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

岡嶌偉久子（おかじま・いくこ）
1985年、甲南女子大学大学院博士課程単位取得。天理大学附属天理図書館稀書目録室長。主要論文「源氏物語国冬本－その書誌的総論－」（『ビブリア』100号）「源氏物語伝二条為明筆本－その書誌的総論－」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「尾州家河内本源氏物語の書誌学的考察－鎌倉期本文の成立－」（『源氏物語の新研究－本文と表現を考える』新典社）

渡辺泰宏（わたなべ・やすひろ）
1955年生まれ。学習院大学大学院博士後期課程修了。聖隷クリストファー大学教授。主要著書『伊勢物語成立論』（風間書房）『平安文学研究 生成』（共著・笠間書院）『伊勢物語 虚構の成立〈伊勢物語 成立と享受1〉』（共著・竹林舎）

大口裕子（おおぐち・ひろこ）
1976年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。霞会館資料展示委員会学芸員。主要論文「伊勢物語絵百十九段と能〈松風〉－「形見こそ」の和歌を中心に－」（『美術史』160号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第四巻

2009年（平成21）10月31日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒 101-0064　東京都千代田区猿楽町 2-2-3
☎ 03-3295-1331㈹　FAX03-3294-0996
振替00110-1 56002

NDC 分類 913.32

ISBN978 4 305-70044 5 C3395
藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

伊勢物語宗印談

（鉄心斎文庫蔵）

山本登朗
大口裕子

桑子にも成たきとなり。玉のをは命のを也。小町、中将にすてられて、衣をうり、鏡をうり、かなしきにおちこちを乞食すとそ。伊勢も中将に捨（ステ）られ、衣をうり、家をうる時、大江の光国と云ものに家をうるとそ。引歌、

『古今』十八巻、

あすか河ふちにもあらぬ我宿もせにかはり行物にそ有けるとそ。あすか河は大和にある河也。此河は夜な〳〵に淵と瀬と替る河なり。男の心も一夜にかはるをたとへよむにや。淵にもあらぬ我宿もせにかはるとは、せは銭也とそ。地書、うたさへそひなひたりけるとは、ひなひたるは、いなかひれたりと云にや。女の歌にとは、小町よむにや。

夜もあけはきつにはめなむくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

とは、夜もあけはきつにはめなては、夜あけはきつねにくはせんと也。くたかけとは、には鳥の事とそ。関東には、一のにはとりと書てくたとよむにや。かけろの鳥とも云にや。かけのとりとも云とそ。かけのとりにはいにしへならの帝の御宇に、物のけ（あ）れは庭鳥にへいをりしきとそ。此松の色のかはらぬやうに、女こと心なくわれに心かはらすは、都へつとにせんとよむにや。小町か人に情をゝき、心のおゝき女とそといえりけれはよろこほいてとは、よろこふを云にや。

十五

第十五

一　むかしみちの国になてうことなき人のむすめにかよひけるとは、中将、二条の后へみそかにかよふとそ。あやしう、さやうにてあるへき女ともあらすとは、れうしにあひかたきとそ。歌、

忍ふ山しのひて通ふ道も哉人の心のおくもみるへく

とは、忍ふ山はおくにある所なれは、七五の句におくもみるへくとつゝくるにや。此しのふのみち一すし、二条の后と中将かむねの間にありて、たかひの心のおくを見ゝるゑんとよむにや。心はたまし（ひ）の事にや。此歌よせひふかきとそ。中将、救世観音のすいしやくにして、天台の一念十界の心もこもれり。山門の伝教も体能破戒即地獄、心結能懼貧即餓鬼、心体能慎恚即肌う心

れぬ心地を死にたきとよむにや。あふみはかゝるといふ事、吟味すへし。

十四

第十四

一　むかしおとこみちのくにもすすろにいきいたりにけりとは、おとこ、中将、みちのくには、奥州にあらす。長良卿のの所に小町侍るに、中将かよひけり。京の人はめつらかにおほえけんとは、小町、中将をむかしのめなりけれはゆかしく侍るとそ。せちにおもへる心とは、せんかたなき事なり。歌、

中〳〵に恋にしなすはくわこにそなるへかりける玉のをはかり

とは、桑子とは、春のにいまゆの虫の事なり。此かいこ、桑の葉をくひてひきて口よりきぬを出してふたつこもりして、なつの比まゆをくひやふりて出てひいると云物になりて、日に一度契りてこたねを生するとそ。契りふかき物にや。中将に小町すてられて四条西のとゐに侍りけるか、今一度中将に契（ちぎ）る度にと、今のをのきれすは切かけて立田河にてまつりをなし、鳥を川に流すとそ。今の平安城に物のけの時は、相坂の関にて七五三縄をかけて相坂の関にてまつりをなし、此鳥を塩やかぬはまへ流すとそ。関の鳥とも云にや。別の鳥とも云事は此鳥『勢至経』の文を唱ていはく、今日已過、明日已近、今生已過、後生已近、我足即寒人早驚、厭者夢世蕉方末とそ。ゆふつけ鳥とも云にや。いま出るにおとこ京へなんまかるとてとは、中将帰るとそ。歌、

くりはらのあねはのまつの人ならは都のつとにいさといはましし

とは、くりはらのあねはの松はみちのくに有。海のほとりにさゝれ石の中に小松おゝく有とそ。此松はひきやすき松にして、かた手に四五本はかりもひかるゝとそ。此松のやうにひきやす（き）女ならは、都へつれて帰りたきと也。是は、『知顕集』の心にして、定家卿のほひにあらす。みちのくのあねはの松は、うみのほとりにいとおゝきなる大木たゝ一本あり。松は諸木にかはりて色かはる事なし。ことにいまの松なみ風にさらされて風たえすしほにもまるゝ松なれとも、すこしも色かはらすうつ